

令和4年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告書 兼 アンケート

参 加 会 議： 第7回会議(経済学分野)

所属機関・部局・職名： 財務省財務総合政策研究所総務研究部研究官

氏 名： 桃田 翔平

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

全体の印象として、多くのノーベル賞受賞者が、過去の自分の業績に拘泥することなく、新しい研究テーマに積極的に取り組み、現在の問題意識に基づいてレクチャーを行っていたことが印象的だった。参加する前はそれぞれの授賞理由を中心として、そのモチベーションやそこから発展について概論的なレクチャーが行われるものだと思っていたが、いい意味で期待を裏切られた。

自身の研究に近いという意味で最も印象に残ったのは、Pissarides 教授のレクチャーである。ロボットや AI のような新技術が労働市場に及ぼす影響を、well-being まで含めて論じたものである。新技術は生産性や well-being を向上させることができるが、それはその技術が正しく使われたときである。新技術が労働者に成長の機会を与えるような形で仕事の質を上げる、あるいは新しい仕事を創出することを条件として提示した。近年多くの IT 企業がそれらの新技術を用いて新しい仕事を創出しているが、それは労働者の多くが持つ能力と合致したものではない。今後はサービス業においてより多くの仕事が創出され、social interaction がスキルとしてより重要になる。政府も教育によってそれを下支えする形でスキルの向上を図るべきだ。異常がレクチャーの要旨であるが、新技術が労働市場に及ぼす影響は私の研究テーマであり、とくに現在はサービス業との関係を中心に研究している。日本は状況が異なるので同列に議論することはできないというのが感想ではあるが、本レクチャーの視点を取り入れて研究を進めていきたい。

Stiglitz 教授のレクチャーはマクロ経済学の方向性についてのもので、需要不足や不均衡分析について、研究を深めるべきだという内容であった。この議論は新しいものではなく、非主流派とみなされてきたものである。自分の研究に取り入れることはできないが、現在の経済状況を考察する上で重要な視点であるという点で学びを得た。

最後に、Milgrom 教授はアメリカにおける水資源の最適配分について進行中の研究について報告された。新しく、社会的に意義のある研究テーマを見つけ、それに積極的に挑戦する姿勢に刺激を受けた。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やエクスカーション等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

ノーベル賞受賞者と直接話す機会はあまりなかったが、Pissarides 教授と食事の際に少しだけ話すことができた。その中で印象に残っているのは、現在の学会では Covid 関連の研究が多すぎることに、近年論文を短くしようという傾向があり、それは望ましいことだが、簡単ではないことの 2 点である。

1 点目の Covid 関連の研究に関しては、当然のことながら Covid 関連の研究に一定の価値を認めながらも、Covid 関連の研究は一般的な含意に乏しいと述べていた。より価値のある研究は一般的な含意をもつものであり、経済学者ならそういった論文を書かなければならないとしていた。私自身、Covid 関連の研究をしているわけではないが、Covid に限らず、テーマ選びの際にそのテーマがどれだけの含意を持ちうるかに意識を払うことの重要性を再確認した。

2 点目の論文の長さに関しては、長い論文は細かい部分まで読むことが難しくなるので、短い方が望ましいが、その一方で頑健性を示すためにどうしても長くなってしまいうことも理解できると述べていた。少なくとも、自分の主張を短くクリアに書く努力は必要だとしていた。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

様々な国の人たちと話したが、日本に来たことがある人や日本に興味がある人が思った以上に多い印象を受けた。日本の文化的な面に興味を持っている人も一定程度いたが、それよりも高齢化や経済成長、経済政策といった日本経済に関心を持っている人が多いのが印象的だった。他のアジア諸国やヨーロッパの国々にとっては、日本が直面している問題は他人事ではなく、ひとつのケーススタディとして日本は重要なサンプルとみなされているようだ。私自身、現在の所属が政府関係の機関にあるため、政策について聞かれることが多かった。残念ながら、自分のポジションは政策立案や政策分析を行うことが求められておらず、自身の研究を進めることが基本であるため、政策について詳細に語るができず、話を続けることができなかった。政策研究に対して興味があるとはいえ、着手することができていなかったが、このリンダウ会議を通して、その研究をすすめるモチベーションを得た。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

今回の会議には日本人および日本の大学の参加者がとても多く、日本人同士の交流の場としてもとても価値があった。専門も実証ミクロ、理論ミクロ、実証マクロ、理論マクロとバランスが取れており、学術的な話題も多岐にわたった。また、ノーベル賞受賞者のレクチャー後の会話ではそれぞれの専門性に基づいた意見があり、とてもおもしろいディスカッションとなった。

専門性の近い研究者との議論では、近年の研究動向や研究から得られた直観を交換することができた。私自身、統計データを直接分析する中で生じている違和感についても共有し、それに対するコメントを得ることができた。日本帰国後の研究に一定の方向性を得ることができ、研究活動としても充実した会議だった。

5. 特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム(イベント)を3つ挙げ、その理由も記載してください。

まず、ノーベル賞受賞者のレクチャーやパネルディスカッションが充実しているのがとても良かった。レクチャーの内容は人によって、自身の最新の研究の報告であったり、概観的な内容であったりしたが、すべて入念に準備されていることが感じられる内容だった。また、パネルディスカッションは逆に、その場で受賞者たちが考えて話しているのが感じられ、少し掴みどころがなくなる場面もあれ、やり取りの中でコンセンサスが形作られていく様を見ることができた。

次に、Get together が良かった。夕食の際に各テーブルに受賞者が座り、若手研究者が自由に好きな席に座るというもので、受賞者と会話する貴重な機会だった。私は Pissarides 教授の近くに座り、少し会話することができた。

最後に、Boat trip が良かった。少し離れた Mainau 島へ移動するために、2~3 時間程度客船に乗って移動するイベントである。なかなか一人で過ごすことが難しい空間で、他の参加者とコミュニケーションを取りやすい環境だった。

6. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット[具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。]

今回は私にとっても久々の対面での学会ということもあり、やはりオンラインだけでは得られない便益があった。集団で交流するとなると、何も共通点がなく、ただ隣にいるというだけで会話をすることになり、普段は自分からは聞こうとしない専門分野の話や、海外の研究動向や業界の特徴を聞くことができた。とくに、このリンダウ会議はさまざまな国からバランスよく参加者が集まっていることもあり、さまざまな国から研究者が参加しており、通常の国際学会と比べても多様性があった。

7. リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

まず、直接的には私自身の研究に今回得られた知見を反映させることでリンダウ会議の成果を日本に還元させることができる。また、今回の参加者の中にも、日本に興味がある者、近々日本を訪れる予定のある者がいた。彼らには日本に来る際には連絡をくれるよう伝えており、彼らを主体として研究や交流の場を設けることで、コネクションの意味で成果を還元することができる。

また、リンダウ会議が価値があるからこそではあるが、今回の経験を話すことで同僚や後輩の海外学会参加の意欲を高めることができた。彼らの多くはコロナ禍に入ってから研究活動を本格化させたため、そもそも対面学会の経験も少なく、また海外学会への参加は縁遠いものと捉えていたと思われる。彼らは次回のリンダウ会議の募集があった際には検討すると言っており、後進につなぐという意味で日本へ成果を還元することができた。

8. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ

まず、英語についてであるが、私自身はあまり英語が得意ではなく、1対1の会話やレクチャーのような形であればそれなりに対応できるが、複数人の会話では多くの場合ついていけないという程度の能力である。それでも十分に価値のある学会であることは間違いないし、実際に多くの刺激を得た。もちろん参加前にできる限り英語の能力を高めるべき(私の反省点である)だが、英語が苦手という理由で応募を見送るのは惜しいと思う。

次に、経済学についてであるが、自身の専門以外の受賞者の話も理解できるように、概要だけでもいいので幅広い分野の知識を蓄えておくのとよりこの会議を有意義なものにできると思う。

最後に、ホテルはドイツのリンダウ事務局から割当てられるが、遠くになったからといって絶望はしなくてもいいと思う。私は今回、乗り継ぎ時間を含めてバスで30分のホテルに割り当てられたが、リンダウ島内とは異なる長閑な環境はいいリフレッシュになった。また、割り当てられた部屋は2人部屋のアパートであったが、国籍が考慮されるようで、日本人参加者と相部屋であった(誰と相部屋なのかは到着するまで知らされない)。

(以上の記載内容は、氏名と併せて日本学術振興会ウェブサイトに掲載されます。)